

### 第三章 アブドッラー外交とその内政的位置付け

松本 弘

#### 1. はじめに

本プロジェクトにおける議論のなかで、サウディアラビアは「普通の国」になりつつあるかといった問題関心が提起された。これを議論するためには、サウディアラビアは現在「普通の国ではない」ということが前提となるため、この前提、すなわちサウディアラビアは「普通の国」か否かについても様々な見解が示された。

筆者個人の意見としては、やはり「普通の国」という印象からは未だ距離があると考えている。たとえば、現在アラブ世界で王制をとる国は8カ国あるが、王族名が国民の呼称に用いられているのはサウディアラビアのみである。その呼称は言うまでもなく「サウデー（サウディ人）」であり、王族は別に「アール・サウド」と呼ばれる。サウディアラビアでの筆者の仄聞によれば、1950年代まで「シャバフ・ジャジーリー（半島人）」という呼称があったが、その後は使われなくなったらしい（この呼称が歴史的なものか、それとも「サウデー」という呼称に対するサウド家以外の者による反発かは不明）。他の国々では「クウェイティー（クウェイト人）」、「ウルドゥンニー（ヨルダン人）」、「マグレビー（モロッコ人）」など、それぞれの地名が用いられている（ここでいう地名とは単なる国名ではなく、現在の国名にもなっている従前からの歴史的な地名のこと）。アラブ首長国連邦では、「連邦国民」という場合に「ムワーティニー・ダウラ・アル＝イマーラート」という呼称を用いるが、日常的には「アブダビー（アブダビ人）」、「シャルジー（シャルジャ人）」など、連邦を構成する各首長国に関わる地名が用いられ、他の国々と変わらない。国民を表す呼称に地名が用いられることをもって「普通」とするならば、王族名をそれに用いているサウディアラビアは、やはり特殊な例と評価されよう。国民の呼称に相応する地名が存在しないという状況は、国民統合や国民国家形成の問題などに関わる多大な困難を示唆している。

ただし、国民統合の問題は本報告書の別稿に用意されているので、本稿の主題は「サウディアラビアは普通の国になりつつあるか」という問題関心を、外交の側面から検証することとしたい。その理由は、近年のサウディ外交に見られる変化から、外交のみならず、サウディアラビアそのものの今後の動向について、有効かつ興味深い考察を提示できると考えるからである。その内容は、アブドッラー皇太子による外交の展開であり、それを通じて捉えられる彼のサウディ政界における位置付けとなる。アブドッラー皇太

子に関する分析や評価は、既に各方面でなされており、それらは本稿でもたびたび言及されることになる。ただ、サウディアラビアという国家がどのような志向性を現在持っており、そのなかでアブドゥラーはいかなる役割を果たしているか、または彼はどのような方向性にサウディアラビアを導こうとしているのかといった観点から、サウディ外交の近年の変化とアブドゥラー皇太子に対する従来の評価を見直す作業は、これまでにない新しい評価を生み出すことになるだろう。それもまた、ひとつの仮説に過ぎないが、今後のサウディアラビアの動向を考える上で、今ひとつの新たな材料を提供することができると思う。

## 2. サウディ外交の史的特徴

第三次中東戦争後の1967年アラブ連盟ハルツーム・サミットでのエジプト・サウディ和解、すなわち「アラブの冷戦」の解消以降、サウディアラビアはアラブ域内外交における主導権または影響力を確保したと言われる。しかし、サウディ外交に対するこれまでの評価は、決して積極的なものではない。ファイサル国王（在位1964～75）の時代は、73年第四次中東戦争時の石油戦略をはじめとして、まだその主導権または影響力が、少なくともアラブ世界では好意的に、また威厳とともに受け入れられていた。しかし、その後のハーリド前国王（在位1975～82）、ファハド現国王（在位1982～）の時代、そのような状況は次第に失われていった。

無論、そこにはアラブ世界が冷戦構造の崩壊に先立ち、既に80年代から脱イデオロギー化を経験していたという背景が大きく関わっている。1979年のサダト大統領イスラエル訪問以降、アラブ世界におけるソ連の影響力は著しく減退し、社会主義体制をとっていた国々も転換期を迎えた。そのような情勢のなかでは、たとえばナセルのようにイデオロギーを前面に押し出した外交を行なう必要はないし、そのナセルに対抗するファイサルのようなイメージもまた、身に付けることができない。ファイサル外交は彼のパーソナリティーに規定されるものであるにせよ、あくまで時代が作り出したものであり、ハーリドやファハドにファイサル外交と同じ内容やイメージを期待することはできない。しかし、外交状況の背景としての脱イデオロギー化のみが、サウディ外交に対する評価を変化させていったわけではない。そこには、当然サウディ側の外交姿勢の問題もある。

サウディ外交の基本は、「イスラーム世界／アラブ世界の盟主」にあると言われる。これは外交自体の問題というよりも、むしろサウディ家の支配の正当性という内政の問題が、その外交に派生したものと見える。サウディ家は預言者ムハンマドの血統を称する

わけでもなく、またアラビア半島諸部族の中で「名門」の部類に入るのであろうが、その部類のなかで抜きん出ているわけでもない。周知のように、その建国理念は第一次ワッハーブ王国から続くワッハーブ派の信仰の擁護と、アブドルアジーズ・サウディアラビア王国初代国王によるアラビア半島征服活動に基づいている。しかし、後者の征服自体は「力」によるものであり、「力」のみによる支配は、より強い勢力の出現になすすべがない。それゆえ、前者のワッハーブ派擁護が、「イスラームの擁護」という支配の正当性につらなり、さらにそれが対外的に「イスラーム世界／アラブ世界の盟主」という外交の基本につらなっている。このことは、「二聖都の守護者」という現国王の称号に最も端的に現れている。

しかし、実際のサウディ外交を見てみると、その最大課題は常にこの「盟主」という外交の基本とサウディアラビアという国の利害との関係にある。なぜならば、王家の支配の正当性に関わる「盟主」という外交の基本は堅持されなければならないが、一方でそれが国益（経済的なものに限らず、政治的なものを含む）と相反する場合には、サウディアラビアはその国益を優先し続けてきたからである。無論、ある一定のプロセスのなかで考えれば、「盟主」と利害とは二者択一的な関係ではなく、両者のバランスを維持していくという意味で、互いに重複しリンケージしている関係にある。たとえば、ある場面では「盟主」であることが国益と重なっていたり、またある場面では、国益優先に対するカウンター・バランスとして「盟主」が強調されたりする。それゆえ、実質的なサウディ外交の基本は、一般に理解される「イスラーム世界／アラブ世界の盟主」ではなくて、それと国益とのバランスにあると、本稿では考える。

「アラブの冷戦」期においても、「盟主」という外交姿勢はサウディアラビアに存在したが、この時期はアラブ民族主義共和制国家群の方が明らかに優勢であり、「盟主」はそれへの対抗姿勢というレベルにとどまっていた。「盟主」の影響力がアラブ世界全体に及ぶのは、第三次中東戦争（1967）でのアラブ側大敗により「アラブの冷戦」が終わり、第四次中東戦争（1973）後の莫大な石油収入が援助や出稼ぎ送金というかたちでアラブ諸国に環流して、サウディアラビアがそのヘゲモニーを確立したあとである。しかし、「盟主」の影響力がアラブ世界に広がったことは、逆にサウディアラビアがその国益を優先しやすい状況を作り出した。これは一見矛盾しているが、「盟主」としての影響力確立は、イデオロギー対立に勝利した結果ではなく、イスラエルの勝利と石油収入の恩恵によりもたらされたものであり、「イスラームの擁護」と直接関わりがあったわけではない。それゆえ、オイルダラーのアラブ諸国への流出が続く限り、サウディアラビアが「盟主」

としての立場よりも国益を優先しても、それが外交問題に発展したり影響したりするような環境は存在しなかった。この傾向はその後の脱イデオロギー化のなかで定着し、サウディアラビアが「盟主」の姿勢をとることが、アラブ域内で政治的な議論の対象となることはほとんどなかった。

「アラブの冷戦」に前後するファイサルの時代のサウディ外交は、未だ「盟主」の姿勢がアラブ域内における自国の体制維持や安全保障に直結しており、そのため「盟主」と国益とのバランス関係は保たれていた。ファイサル外交に威厳が備わっていたのは、そのためであろう。しかし、ハーリド、ファハドの時代には、「盟主」の影響力が確立されるとともに、国益優先を可能とさせる環境が現出した。このため、一定のプロセスとして見れば、「盟主」と国益とのバランスは依然重要であるにしても、個別的な事例ではサウディアラビアが国益を優先する場面が目立つようになった。すなわち、「盟主」と国益とのあいだのギャップが、次第に拡大していく傾向が見て取れる。ハーリド、ファハド時代のサウディ外交が、積極的な評価を得ることができない理由はここにあると考える。

一言で言えば、周辺から見て、サウディ外交には「信頼性」が低いのであろう。たとえば、「イスラーム世界／アラブ世界の盟主」を唱えながら、自国の安全保障においてアメリカと実質的な同盟関係を構築している。また、石油価格安定が産油国全体の利益であるにしても、価格高騰時に大量の原油を生産・供給してバランスとしての役割を果たすことは、アメリカをはじめとする先進工業諸国の意向に沿ったものと理解される。中東和平やアラブ世界周辺部の国境紛争など、アラブと非アラブとの問題には時に積極的な姿勢を見せるものの、アラブ域内の諸問題では傍観者か、あるいは紛争の当事者（GCC内対抗関係や国境問題、湾岸戦争など）という印象が強い。ファハド国王によるレバノン問題の仲裁が、唯一の例外と言える程度であろう。

無論、サウディアラビアから見れば、アメリカとの関係は一般に「アンビヴァレント」と評価されるように、決して単純ではない。「イスラームの擁護」という支配の正当性の問題などから、両国関係には国内からの批判も強い。このため、サウディ政府は「いかなる外国とも同盟関係にない」、「外国の軍隊の駐留は認めていない」との公式見解を繰り返すが、その矛盾は湾岸戦争後の94年ブライダ事件などで噴出している。

以上のように、アラブ域内において影響力を確立してからのサウディ外交は、アラブ域内にしろ対米関係にしろ、わかりにくいというのが最大の特徴であろう。しかし、この「わかりにくさ」に関して、最近になって変化が見え始めていると思う。その変化は、

アブドゥラー皇太子による外交活動を契機としている。

### 3. 「アブドゥラー外交」の登場

これより、サウディ外交の近年の変化につき述べることになるのだが、実はその説明には困難を伴う。既述のように、その内容はアブドゥラー皇太子による外交活動であり、それは90年代後半から始まったものである。しかし、少なくとも表面的には、目に見える変化は限られている。後述する各事例を除けば、アブドゥラーが外交に果たす役割は従前と変わらない。ファハド国王による外遊がないため、国連やOIC、アラブ連盟、GCC、OPECの各サミットには以前からアブドゥラーが出席していたし、アラブをはじめとする外国への訪問や外国要人葬儀への列席なども数多く行なっている。また、外国の要人がサウディアラビアを訪問する際は、ファハド国王とアブドゥラー皇太子双方と個別に会談することが慣例となっている。それゆえ、外遊や外国要人との会談をアブドゥラーが頻繁に行なうこと自体に、変化があるわけではない。しかし、そうした従前からの活動に重なるかたちで、以前とは明らかに異なる状況も看取することができる。そのような変化は、未だ明確な全体像を示しておらず、評価することが難しいが、本稿ではアブドゥラーによる外交の展開と政界における彼の位置付けとの関連から、その考察を試みることにする。

サウディアラビアの王位継承問題は常に議論的であったが、その議論が現実味を帯びたのは、1995年11月にファハド国王が入院し、翌96年1月1日の勅令にてアブドゥラー皇太子に国王の権限が委譲された時のことである。ただし、この時は短期間でファハド国王が職務に復帰し、原状に戻っている。次にアブドゥラーが注目されたのは、1997年12月のOICテヘラン・サミットに彼が出席し、それがサウディ・イラン関係修復の契機となったことである。当時、二重封じ込め政策をとるアメリカは、イスラーム諸国、特に主要アラブ諸国に対し、イランで開催される上記サミットにハイランクの出席者を送らないよう要請していたと言われる。にもかかわらず、サウディアラビアは出席者のランクを落とすことなく、通常どおりアブドゥラー皇太子を送り出した。この時、エジプトもムーサー外相を参加させたが、注目の度合いはサウディアラビアの方に集まった。翌98年2月には、イランのラフサンジャーニー社会公益判定会議議長がサウディアラビアを訪問し、両国の関係修復は完全に軌道に乗った。それは、一般にアブドゥラーの功績と受け止められている。

その直後の同年3月にファハド国王は短期間入院し、8月には再び入退院を繰り返す

た。それ以降、アブドゥラー皇太子が閣議を主宰する機会が増えた。皇太子による閣議主宰にも前例があり、それ自体は目新しいことではないが、その頻度は国王の病気により明らかに高まった。そして、国王が退院した翌9月から10月にかけて、アブドゥラー皇太子は、英仏米中日韓パキスタンという欧米アジア7カ国歴訪を行なった。この歴訪をもって、アブドゥラーによる外交活動が一気に注目されるようになり、サウディアラビアの変化の兆しと絡めて、様々な議論を喚起することとなった。

翌99年5月には、イランのハータミー大統領がサウディアラビアを訪問した。その訪問直後の同5月、アブドゥラーは再び南ア、伊、モロッコ、リビア、シリア、エジプトの6ヶ国歴訪を行なっている。皇太子が大規模な歴訪を2年連続で行なう例はそれまでにはなく、アブドゥラーの皇太子としての最終的な地固めと、王位継承のための準備活動であると目された。アブドゥラー歴訪の翌6月、ファハド国王は手術を行い、7月17日には療養のためスペインに向かった。2ヶ月後の9月29日、ファハドは帰国して職務に復帰したが、その間の7月21日にはイランのハッラージ - 外相がサウディアラビアを訪問し、アブドゥラーが対応している。

以上は、ファハド国王の入院や国外療養とアブドゥラー皇太子の外交活動を、特にイランとの関係や歴訪に絞って追ったものである。この間アブドゥラーはそれ以外にも、既述したように各種サミット出席やアラブ諸国をはじめとする諸外国への訪問を、精力的にこなしている。ファハドの入院や国外療養のない2000年以降も同様に、昨年には国連サミット出席のあと、南米3ヶ国歴訪（ブラジル、アルゼンチン、ベネズエラ）を行ったし、多くのアラブ諸国を訪問している。

97年12月から99年7月までのおよそ一年半のあいだに、アブドゥラー皇太子のOICテヘラン・サミットへの出席や大規模な歴訪と、ファハド国王の入院や国外療養が繰り返されたため、アブドゥラーの動向に注目が集まった。それゆえ、その外交活動は「アブドゥラー外交」と強調されたし、ポスト・ファハドを巡る議論では以前にも増して、次期国王としてのアブドゥラーがクローズアップされた。しかし、冒頭で述べたように、アブドゥラーが外遊や外国要人との会談を活発に行うことは、近年に限ったことではない。イランとの関係修復に大きな役割を担い、大規模な歴訪を続けることは重要ではあるが、我々が看取する変化とはそれにとどまるものではない。その変化とは、「アブドゥラー外交」の延長線上に展開されている、アブドゥラーの内政上における立場や役割を含めるものである。

アブドゥラー・ブン・アブドルアジーズ・アール・サウードは、アブドルアジーズ初

代国王（在位1932～53）の王子として1923年に生まれた（同年に三人の王子が誕生しているため、第10男から第12男のあいだのいずれかであるが、詳細は不明）。第8男であるファハド国王とは、2歳違いとなる。母は、シャンマール部族出身のアル＝ファフダ・ピント・アシー（ラシード家）。1964年、第2代国王サ우드（在位1953～64）退位に伴い、第3代国王ファイサルにより国家警備隊長官に任命された。75年、第4代国王ハーリドにより第二副首相に任命され、82年にはハーリド死去に伴い皇太子となり、ファハド国王より第一副首相に任命された。国家警備隊は兵力7万5000で、国境地域に配置される国軍10万5500に対するカウンター・バランスとして、主として都市部周辺に配置されている。部族単位で編成される部隊を含み、特にサ우드家への忠誠度が高い軍事組織であると言われる。

アブドゥラーへの評価としては、国内、特にナジュド地方の部族勢力と緊密な関係にあることや、部族またはイスラーム（ワッハーブ派）に関わる保守派と目される人々の代表や代弁者といったものが強調される。また、アラブ諸国との関係もおしなべて良好で、特に母親の出身と同じ部族が国境を越えて存在するシリアとの関係は、よく知られている。しかし一方で、彼はこれまで政策中枢や行政の実務に参画していない。アブドゥラーは国家警備隊長官として、就任以来その近代化や組織拡充に多大な実績を残しており、閣僚格として閣議にも出席しているが、閣僚には今まで就任していない。このことに関しては、ファハド国王やスルターン国防航空相、ナーフ内相、サルマーン・リヤド州知事などの、いわゆるステイリー・セブン（同腹の7人兄弟）との対抗関係が指摘されている。アブドゥラーには同腹の兄弟はおらず、バンドル王子という同年齢の兄弟とは親しいが、兄弟のなかで特定の基盤や勢力を持ってはいないと言われる。ステイリー・セブンがファハド国王を中心にサ우드家のなかで勢力や権益を確立している一方で、アブドゥラーはそこから阻害されているというのが、一般的な見方となっている。

確かに、政策や行政の経験がアブドゥラーに無かったことは事実である。しかし、上記「アブドゥラー外交」との関連で、政策や行政に関わる彼の立場は大きく変化している。98年の欧米アジア歴訪の際、アブドゥラーは欧米において、各国の石油会社代表とサウディアラビアへの外資導入につき協議を行っている。歴訪から帰国した直後の同年11月、サウディアラビアに石油委員会が設置され、アブドゥラーはその委員長に就任した。翌99年9月には最高経済会議が設置されてその議長となり、さらに2000年1月には石油鉱物資源問題最高会議が設置され、その副議長に就任した。これら一連の石油・天然ガス関連のハイレベルな機関新設は、言うまでもなく石油・天然ガス産業の効率化・

活性化を目的とするものであり、そのための最大の課題が外資導入である。アブドゥラーが上記歴訪の際に欧米石油会社にサウディアラビアへの投資について説明を行って以後、サウディ国内では投資法の改正や外国企業への課税引き下げ、代理店制度の緩和、外国人による不動産所得許可（メッカ、メディナを除く）など、外資導入に向けた一連の政策変更が続き、2000年4月にはサウディアラビアにおいて欧米石油会社との集中的な交渉が実施されている。これらは、アブドゥラーが道筋をつけたものであり、石油鉱物資源問題最高会議の議長はファハド国王ではあるが、この機関もその道筋に沿ったものであることは疑いない。

石油委員会、最高経済会議、石油鉱物資源問題最高会議のいずれもが、そのメンバーに関係閣僚を含んでいる。アブドゥラーは上記歴訪以降、石油・天然ガス産業への外資導入というサウディアラビアにとっての最重要課題のひとつにおいて、閣僚レベルを乗り越えて、多くの閣僚の上に立つ政策責任者となった。それは、外交と一体となった国家の重要課題の、実質的な最高責任者を意味している。「アブドゥラー外交」という言葉は、彼がサウディアラビアの外交面を担当しているという意味では、もはや使えない。それは、アブドゥラー皇太子に、サウディアラビアの政策中枢に確固たる足場を築かせるものであったのである。

#### 4. アブドゥラー皇太子を取り巻く政治的環境

これまで述べた「アブドゥラー外交」と彼の内政上における位置付けは、いわばサウディアラビアの最近の変化に関わる表層の問題の確認であった。その表層の問題から、より深層の問題に近づくために、ここではアブドゥラー皇太子、サウディアラビア、世界/地域という、互いに重なり合う3つのレベルを設定して、サウディアラビアという国家の今後の志向性につき論じてみたい。

アブドゥラー皇太子のレベルとしては、ファハド国王の健康問題が表面化・深刻化して以降、皇太子としてその職務を代行し、最近では上述したように重大な責任や権限を与えられ、新しい姿勢を打ち出している。このこと自体は、既に多くの指摘がなされているが、ここではサウディアラビアの国王と皇太子に関わる歴史という視点から、その性質につき評価してみたい。アブドゥラーが皇太子でありながら、政策や行政の経験を有さなかったことは既に述べた。その理由としてのスデイリー・セブンとの対抗関係という指摘も述べたが、政策や行政から遠かった皇太子は、アブドゥラーだけに限らない。

サウディアラビアでは国王自身が強大な権力を持ち、国王による判断がすべてを決定



する絶対王政であると言われる。それは間違いではないが、その内実には考慮の余地がある。サウディアラビアはこれまで、自身で積極的に国政を執る国王と、実質的な政務を有能な皇太子に委ねる国王とが、交互に繰り返されている。便宜的に前者をポジティブ、後者をネガティブと表現してみると、初代国王アブドルアジーズは、当然建国の父として、ポジティブな国王であった。第2代国王サウードは、皇太子時代にアブドルアジーズの副官といった地位にいたものの、浪費家で国王としての統治能力に欠けるネガティブな国王であり、ファイサル皇太子を中心とする勢力に退位させられた。第3代国王ファイサルはポジティブな国王であったが、その皇太子ハーリドは若い頃から病弱で、第4代国王に即位しても、ファハド皇太子が実質的に国政をとるネガティブな国王であった。そして、第5代となるファハド現国王は、ファイサルと同じく、皇太子時代から引き続き自身による国政を続けるポジティブな国王である。よって、サウディアラビアという王国には、ポジティブな国王とネガティブな皇太子という組み合わせと、ネガティブな国王とポジティブな皇太子という組み合わせが、交互に現れているのである。このことは、首相（閣僚会議議長）が国王であったか、皇太子であったかに如実に表れている。

この順番で行けば、ファハド国王がポジティブであるため、アブドッラー皇太子はネガティブということになり、彼が国王に即位しても、その皇太子（スルターン国防航空相であれ誰であれ）がポジティブとなって、国政を見ることになる。私見ながら、ファハドの健康問題が出るまで、そのような組み合わせには現実感があつたと思う。ステイリー・セブンとアブドッラーの対抗関係の問題は、あくまで共時的な見方であり、上記のような通時的な見方を取れば、アブドッラー皇太子に政策や行政の経験が無いことは、いわば王位継承に関わる巡り合わせの問題であり、むしろ当然の結果と言える。しかし、ファハドの健康問題は、そのような巡り合わせを一変させた。ファハドはその存命中に、ポジティブな国王からネガティブな国王に変質し、アブドッラーは逆にネガティブな皇太子からポジティブな皇太子に変身した。それはサウディ史上初めて、2代続けてポジティブな国王が現れる可能性を生み出し、今の状況が続けば、その可能性は間違いなく現実のものになる。

無論、アブドッラー皇太子がサウードやハーリドほどネガティブでないことは、明らかである。特に保守派からの人望は厚いし、アラブ諸国からの信頼も厚い。アブドッラーをネガティブと評したのは、彼が資質や能力の問題ではなく、あくまで過去の国王と皇太子の組み合わせ、巡り合わせの経緯による。資質や能力から言えば、彼はむしろポ

ジティブな皇太子であろう。それゆえにこそ、国王の健康問題以降、皇太子としての職務を積極的、精力的に行うことが可能であったと言える。

ただ、国王の健康問題以前は、やはりその能力を試す場が限られていた。既述のように外交面では長く活動していたものの、その役割のひとつは、アメリカの意向に反することをファハド国王に代わって表明することにあっただと思う。それは、たとえば97年中東・北アフリカ経済会議（ドーハ）へのサウディ不参加表明や上記OICテヘラン・サミットへの出席、昨年のパレスチナ情勢に関わるアラブ連盟緊急カイロ・サミットでの強硬発言といったものである。これらはアブドゥラー個人の判断で行えるものではなく、明らかにファハド国王を中心としたサウディアラビアの国家としての判断に基づいていよう。中東・北アフリカ経済会議への不参加は、言うまでもなくイスラエル・ネタニヤフ政権による和平プロセスの停滞に対する、サウディアラビアの反発ないし抗議であった。OICテヘラン・サミット出席やそれに続くイランとの関係修復も、93年にサウディアラビア政府が国内東部州のシーア派住民と和解して以降、両国が修復の機会を探り続けていたプロセスのなかで行われたものである。しかし、そのような判断がアメリカの意向に反するものである場合、常にそれを表明する役回りはアブドゥラーが果してきた。その理由は、ファハドやスルターンがそれを行えば、アメリカとの関係に悪影響が出かねないが、彼らと対抗関係にあり国内保守派により近いと評価されるアブドゥラーであれば、その悪影響は最低限に抑えられるといったところにあると思う。

そうであるならば、アブドゥラーはファハドやスルターンのフォローを行っているのであり、そこには主要王族としての協力関係が存在することになる。ステイリー・セブンとアブドゥラーの対抗関係は、一般に「常識」となっている。しかし、そのような対抗関係があるにしても、別のところでサウディ政府がその「常識」を利用して、巧妙な役割分担を続けてきた可能性は大きい。役割分担は、アメリカとの関係に関わる場面以外でも見られ、ファハド国王が前面に出るかたちでアラブ諸国との関係が悪化した場合に、その関係修復に際してアブドゥラーが一定の役割を果す事例が多い。いわば対米関係の場合とは逆に、ファハドやスルターンが対外的に強面である場合、アブドゥラーがそのカウンター・バランスとして外交上の穏健なイメージを与えている。

このようなアブドゥラーの役割は、国内やアラブ諸国からは良好な反応を得られるが、アメリカからは警戒される「敵役」、「憎まれ役」となる。しかし、98年の欧米アジア歴訪以降、アブドゥラーの役割はもはや「憎まれ役」や穏健イメージを越えて、ファハドやスルターンのカウンター・バランスではなく、サウディ外交そのものに近づいている。

アメリカのアブドラーに対する評価にも明らかな変化が見られ、それは警戒すべき対象から、国政の中心という評価に既に移行していよう。このこともまた、アブドラー皇太子のネガティブからポジティブへの変身に関わる一証左であると言える。

次に、サウディアラビアというレベルで考えてみる。サウディアラビアは現在、経済、財政、失業などの深刻な問題に直面している。その問題に関しては様々な分析がなされているが、敢えて数字を挙げれば、98年の一人あたり国民所得は6441ドルで、81年に比べ55%の減少、失業率は93年の12%に対し99年は27%、政府債務は1304億ドルであり、GDPの98%に相当している。サウディアラビアは依然世界最大の石油輸出国ではあるが、その経済状況は長期にわたる石油価格低迷や人口増により悪化を続け、解決が困難な多くの社会問題を生み出している。最近の石油価格高騰により、持ち直しは見られるものの、少なくともこれまでの収入増は過去の財政赤字をカバーするにとどまると言われ、石油価格が落ち着きを見せ始めた現在、サウディアラビアの経済・社会問題が深刻な政治問題に直結していることに変わりはない。このため、国内産業構造の脱石油化やサウダイゼーション（労働者のサウディ人化）などが図られているが、経済の中心が石油にあることは明らかであり、むしろ石油産業の活性化が最も効率的な打開策である。

既述のように、石油委員会、最高経済会議、石油鉱物資源問題最高会議の設置もそのためのものであり、なかでも石油・天然ガス産業に対する外資導入はその突破口と位置付けられている。アブドラー皇太子は、既にこの問題に関する最高責任者となっている。このことは、アブドラーの政治力拡大を意味するのみならず、皇太子自身が国政の重要課題にあたっているため、アブドラーが次期国王に即位したあとも、政策的な変更や混乱がないことを示している。問題の解決には多大な困難が予想されるものの、王位継承に関わる政治的な混乱や停滞を回避し得る状況は、サウディアラビアの安定性に大きく寄与するものであろう。

最後に、世界や地域といったレベルを見てみたい。これは、冷戦崩壊以降の世界的な変化とサウディアラビアとの関係に関わる問題であり、上述したサウディ外交の国益と「盟主」とのバランスに関わる問題である。

上記欧米アジア歴訪から帰国した98年10月、アブドラー皇太子はファハド国王への報告において、「歴訪の目的のひとつは、海外におけるサウディアラビアのイメージをソフト化することであった。」と述べたとされる（98年10月27日付アラブ・ニュース紙）。イメージのソフト化とは、この時アブドラーが「サウディ人は笑わないと思われている。」と述べたと報じられていることから、より広い一般的な問題という意味合いなのだ

ろう。しかし、サウディアラビアという国家やサウディ人自体のイメージのソフト化は、近年のサウディ外交の変化と、傾向を同じくするものであると思う。たとえば、サウディアラビアをめぐる国境問題には、その解決や合意が相次いでいる。

湾岸戦争が発生した原因のひとつとして、アラビア半島における国境問題が注目され、1995年前後から半島諸国間でその解決のための交渉が数多く開始された。けれども、解決に至ったのは、それ以前から国境画定作業を合意・実施していたサウディ・オマーン間及びイエメン・オマーン間の国境問題のみで、そのほかの国境問題には大きな進展はなかった（サウディ・オマーン及びイエメン・オマーンは、ともに95年に画定作業を終了し、国境画定文書に署名）。しかし、「アブドッラー外交」と軌を一にするように、99年にはサウディ・カタール国境画定地図署名、2000年にはサウディ・イエメン国境条約調印とサウディ・クウェイト海上国境協定署名が行われている。99年以降のこれら3件の合意では、その署名ないし調印はサウード外相によるものだが、署名ないし調印式にアブドッラーがサウディ側の最高ランク出席者として立ち会っている。

イエメン・オマーン間の国境合意もあるので、これはサウディアラビアの問題というよりアラビア半島諸国の問題であるが、サウディアラビアはその半島諸国すべてと国境を接する唯一の大国であり、サウディアラビアの国境問題に対する姿勢が、問題解決のための最大要因であることは論を待たない。そのサウディアラビアが、大国のヘゲモニーを振りかざして強硬姿勢を続ければ、問題の相手国もまた態度を硬化させ、とても解決はおぼつかない。これまでの交渉に長い時間を要した理由には、歴史的背景などの多くの要素とともに、実際にはサウディ側の強い姿勢からくるそのような感情問題も大きかった。しかし、最近になって合意や解決が相次いだことから、そこにサウディ側の姿勢の変化が読み取れる。そして、それは「アブドッラー外交」とタイミング的に重なっているのである。

国境問題以外の場面でも、サウディ外交の同様な変化を見ることができる。たとえば、サウディ・イラン関係修復の傾向に、イランと領土問題を抱えるアラブ首長国連邦が不快感を覚え、サウディ・UAE関係が悪化した際、99年6月にカタールがこの問題に対する調停を申し出た。この時、サウディアラビアはその申し出を受け入れ、サウディ国内において3ヶ国が協議を行い、和解が成立している（3ヶ国の代表はカタールのハマド首長、UAEの高官、そしてアブドッラー皇太子）。2000年5月には、クウェイトが自国領と主張している地域でイランが天然ガス田の掘削作業を開始したことから、クウェイト・イラン関係が緊張する事件があった。この時は、サウディアラビアがイランに抗議を行い、イランはそれを受け入れて掘削作業を中止している。

以上のような国境問題の解決や事件・紛争に対する柔軟な姿勢は、過去のサウディ外交にはあまり見られなかったことであり、少なくともそれまでのイメージとは異なるものである。2001年1月のGCC外相会議が、イランへの強硬姿勢を打ち出したことなどの反例もあり、これは未だ目に見える明確な変化とは言い難いものの、全体的な傾向として、サウディ外交が柔軟化していると判断できると思う。ここでは、それをアブドッラーの発言に倣って、便宜的にサウディ外交の「ソフト化」と呼ぶことにするが、そのようなソフト化は、どのように評価できるのだろうか。

冷戦崩壊及び湾岸戦争後の中東情勢に関する分析や評価において、最近「プラグマティズム」や「プラグマティックな傾向」という言葉をよく見かけるようになった。ただし、この言葉を用いる研究者その他は、すべて言葉の厳密な定義を行っておらず、その意味はあいまいなままである。私見によれば、90年代以降の中東には、それ以前とは異なる大きな質的变化が進行していると誰もが感覚的には理解しているのだが、未だその全体像を把握できず、仕方なくその変化を「プラグマティック」と呼んでいるのだと思う（それゆえ、これはアメリカの現代哲学・思想とは直接の関係はないと思われる）。それは、民主化措置や情報統制・国内治安対策の緩和など、広い範囲で見られる、脱イデオロギー化の結果としての国内情勢を重視する姿勢と言える。換言すれば、それは国家がイデオロギーに基づいて理想社会を建設するという目的を、時代にそぐわないものとして放棄し、代わりに国民経済を最優先に考え、目の前の問題をひとつひとつ解決するための実務機関に政府が特化していく傾向であると思う。

この「プラグマティックな傾向」は、サウディ外交の近年の変化にも当てはまるのではないか。それは、上記「ソフト化」であり、「アブドッラー外交」であり、アブドッラーが責任者を務める重要政策である。その意味では、「ソフト化」とは現実志向と重なるものであり、現実志向はサウディアラビアよりも、むしろ他の中東諸国において先行している。「アブドッラー外交」の登場により、サウディアラビアもようやく現実路線が軌道に乗り始めたと評価できると思う。「アブドッラー外交」や「ソフト化」に見られる外交の対外協調姿勢は、言うまでもなく深刻な国内問題の解決と密接にリンクしているものであり、サウディアラビアという国家が冷戦崩壊以降の世界的な変化に沿って、「プラグマティックな傾向」を実践しつつあることを示している。

## 5．評価

以上、アブドッラー皇太子、サウディアラビア、世界／地域という3つのレベルから、

近年のその変化について考察を試みた。その結果として、アブドッラーを取り巻く政治的環境が、彼にとって極めて理想的な状況にあることがわかる。すなわち、上記3レベルでの変化は、すべて同じひとつの方向性を指し示しているのである。これは一見当たり前のようだが、このように個人、国家、国際という異なるレベルを比較して検討すると、個人と国家や国家と国際の方向性がぶつかり合ったり、矛盾したりして、事態が順調に推移しない事例の方がはるかに多い。しかし、アブドッラー皇太子の現在の環境は、個人のレベル（ネガティブからポジティブへ変身）、国家のレベル（深刻な問題に対処する必要性）、国際のレベル（「プラグマティックな傾向」）のいずれにおいても、その政治的立場や活動を積極的に後押しするものである。それは、サウディアラビアが国家の志向性として、問題の解決を最優先する現実路線を選択していることを、そして国内的にも国際的にもそれがより可能な環境が形成されていることを意味しており、その中心にアブドッラー皇太子が存在する。

「アブドッラー外交」については、それがアブドッラーという政治家個人のイニシアティブによるものか、それともファハド国王を中心とするサウディアラビアの対外政策全体のなかに位置付けられるものなのか、という問題意識が常に議論される。サウディアラビアには、外交政策は王族の専管事項といった状況があり、外務省や外相は外交政策上の権限をあまり与えられていない。そのため、アブドッラー皇太子自身による外交イニシアティブは十分可能ではあるが、本稿の仮説をとるのであれば、アブドッラーの職務は、もはや個人のイニシアティブという段階を過ぎていよう。アブドッラーの政治的存在は大きくなって、サウディアラビアの国政そのものと重なりつつある。全体の方向性や枠組み自体は、主要王族の総意に基づくサウディアラビアの国家としての選択であり、そのなかで実務面での最高責任者として彼個人のイニシアティブが発揮されているとする見方が、おそらく最も現実に近いと思う。

そうであるならば、先に述べたサウディ外交の基本である、国益と「盟主」の間のバランスにも、今後大きな質的变化が予想できる。つまり、共和制をとるアラブ諸国の多くが、既にアラブ民族主義や社会主義というイデオロギーのくびきから解放されているように、サウディアラビアも「イスラーム世界/アラブ世界の盟主」というくびきから解放されていくのではないか。アラブ民族主義というイデオロギーが、言わば常識として受け入れられ、政治的な議論の対象にならないほど一般化、形骸化したように、サウディアラビアの「盟主」という立場も、今後当然視されることによって、逆にその政治的意味を国内的にも国際的にも失っていくのではないか。「盟主」という看板をサウディ

アラビアがおろすことは想定できないが、その看板を掲げる意味は形式化、形骸化していく、もしくは既にそうなりつつあると思われる。

その結果、いずれサウディアラビアは国益と「盟主」とのバランスを考慮することなく、これまで以上に国益を優先した外交政策をとることが可能となっていくだろう。しかも、それは少なくとも対外的には、他の国々と同様にプラグマティックな傾向をとっているという評価の下、許容され当然視されていくものと考えられる。そこでは、国益と「盟主」との関係が、もはやバランスをとる必要がないほど乖離する傾向が進むと思われる。そのような傾向は、サウディ外交の「わかりにくさ」を解消する方向にはたらくに違いない。それはとりもなおさず、アブドゥラーが推進している、もしくはサウディアラビアという国家が志向しアブドゥラーがその中心的役割を担っている現実路線を、支えるものとなるのである。

無論、そのような現実志向は、これまでと同様、サウディ国内の部族やイスラーム（ワッハーブ派）に関わる保守派の性向と軋轢を生じさせるものであり、その問題はサウディ家の支配の正当性という国家の基盤に関わっている。それは、サウディアラビアやアブドゥラーが目指す現実路線にとって、いわば最大の障害でありネックである問題と言える。しかし、先に指摘したように、アブドゥラーはその保守派と長く緊密な関係を保っており、ファハド国王よりも保守派を抑えて現実路線をより可能とさせる政治的背景を有している。「アブドゥラー外交」以前においては、アブドゥラーが王位を継承した場合、その保守派との関係から、ファハド国王による近代化や親欧米路線を後退させ、逆にサウディアラビアを保守化させるという評価が一般的であった。特に、アメリカがアブドゥラーを警戒の対象としている時期は、そのような見方が強かったと思う。しかし現在、そのような評価は現実感を伴っていない。国内保守派との関係ゆえに、アブドゥラーはサウディアラビアを保守化させるのとは逆に、むしろファハドやスルターンよりも、現実路線をより推進していくことができると思う。そして、この方向性が堅持されている限り、サウディアラビアは間違いなく急速に「普通の国」となっていくものと評価できる。

以上のように、アブドゥラー皇太子が今後のサウディ政局を担う環境は、ほぼ完璧に近い状態で整備されている。しかし、アブドゥラー次期国王による国家運営に、不安な要素がまったく無いわけではない。それは、アブドゥラー国王即位の際、おそらくは確実に皇太子となるであろう、スルターン国防航空相との関係である。これもまた、一般にはステイラー・セブンとアブドゥラーの対抗関係から指摘される問題であるが、本

稿の仮説からすれば、それとは異なる視点から論じることができる。既述の国王と皇太子の組み合わせ、巡り合わせからしても、またその経歴や能力からしても、スルターンがポジティブな存在であることは明らかである。アブドッラーがポジティブな皇太子から、そのままポジティブな国王に移行することはほぼ確実であり、そうなれば、これまたサウディ史上初めて、ポジティブな国王とポジティブな皇太子が、同一時間帯に並立することになる。

ファハドとアブドッラーの関係は、ファハドがポジティブからネガティブに変わることによって、アブドッラーがネガティブからポジティブに変身したため、同一時間帯にポジティブ同士がぶつかり合うことはなかった。しかし、現在の状況に大きな変化がない場合、アブドッラーの王位継承は、国王と皇太子がポジティブ同士として、ぶつかり合うことを意味している。その際、スルターンがポジティブな国王としてのアブドッラーを尊重して、アブドッラーのイニシアティブによる国政に協力していくのか、それともアブドッラーがポジティブな皇太子としてスルターンに配慮し、一定のパワー・シェアリングを行うのか。両者のいずれかであれば、サウディアラビアの安定性に問題はなかるうが、アブドッラー国王とスルターン皇太子が、正面きってぶつかり合う事態ともなれば、せっかく軌道に乗っているサウディアラビアの現実路線が、大きく揺らぐことになりかねない。そのような混乱に陥れば、サウディ王制の歴史の浅さからくる王位継承問題の不安定さが浮き彫りとなり、サウディアラビアは「普通の国」とは見なされない状況が続くことになる。

#### 主要参考文献

- Hasan, Muḥammad b. I. al-, *al-Muwāṭinah wa Taṭbīqāt-hā fi al-Mamlakah al-'Arabiyyah al-Sa'ūdiyyah*, Riyadh, 1995, 2vols.
- Idrīs, Muḥammad A. b. M., *Min 'Uyūn al-Waṭan*, Jeddah, 1997.
- Khāshiqjī, Hānī Y., *al-Tanzīm al-Idāri fi al-Mamlakah al-'Arabiyyah al-Sa'ūdiyyah*, Riyadh, 1993.
- Yāsīnī, Ayman al-, *al-Dīn wa al-Dawlah fi al-Mamlakah al-'Arabiyyah al-Sa'ūdiyyah*, London, 1987.
- Abir, M., *Saudi Arabia; Government, Society and the Gulf Crisis*, London, 1993.
- Cordesman, A.H., *Saudi Arabia; Guarding the Desert Kingdom*, Boulder, 1997.



Grayson, B.L., *Saudi-American Relations*, Washington, 1982.

Long, D.E., *The United States and Saudi Arabia; Ambivalent Allies*, Boulder, 1985.

....., *The Kingdom of Saudi Arabia*, Gainesville, 1997.

Peterson, J.E., *Historical Dictionary of Saudi Arabia*, London, 1993.

Rathmell, A. and Alani M., *Saudi Arabia; the Threat from within*, Jane's Intelligence Review  
Special Report no.12, Nov. 1996.

拙稿、「サウジ・イエメン関係の史的傾向」、『現代の中東』、25（1998.9） pp.2-18。

、「サウジアラビア - リヤド一極集中と社会構造の新たな変化 - 」、『日本国際問題研究所平成8年度外務省委託研究報告『中東諸国の政治経済構造と政策決定の基本条件』、1997、pp.98-114。

、「アラブ民族国家試論 - サウジアラビアとイエメンを事例として - 」、『日本国際問題研究所平成9年度自主研究報告『平和体制の国際的保障』、1998、pp.34-50。

、「サウジアラビア - アンビヴァレンスの意味 - 」、『日本国際問題研究所平成9年度外務省委託研究報告『米国と中東』、1998、pp.38-46。

、「湾岸と米国」、『日本国際問題研究所平成10年度外務省委託研究報告『米国の対外政策と中東』、1999、pp.45-55。